

呉線沿線の美術 —戦前の呉地域を中心に—

倉橋清方

地域美術館の使命 呉市立美術館は、1982(昭和 57)年の開館から数えて今年で 25 周年を迎えた。地域文化振興拠点の一端を担う地方公立美術館としては、地域の文化活動に目を向けた事業も当然ながら重要な意味合いを持つ。呉線沿線地域では、地域固有の文化運動が大々的に展開されたとか、格別に個性あふれるグループが生まれたとか、そういう目立った特色があるわけではない。しかし、広島～呉間に呉線が開通して百年、沿線各地からは多くの美術作家を輩出してきた。こうした美術作家をあらためて掘り起こし顕彰することは、地域の美術館として大切な作業であると考えた。これが本展覧会開催の動機である。

断片的ではあるが、呉地域の戦前期を中心とする状況を以下に記すことにする。

鉄道の役割 呉線の建設は 1901(明治 34)年に始まり、1903(同 36)年 12 月、まず広島～呉間が開通した。三原～呉間は「三呉線」といい、呉～広島間の建設よりずっと遅れて 1935(昭和 10)年 11 月 24 日開通。これによって三原～海田市間の鉄路は一筋に連結され、今日の呉線が誕生することになった。

呉線敷設の主要目的が建設の当初において、兵員や軍需物資、海軍工廠の資材輸送など、軍事目的にあったことは言うまでもない。しかし他面において、沿線各地域の産業経済や文化面でも大きな効果をもたらした。それまでの当地域では、陸路による場合は徒歩又は小型人力車両によるか、あるいは海路船舶によるほかに迅速にして大量の交通・輸送手段というものを持ち合わせなかった。これが鉄道の敷設によって、単線ながらも迅速・大量の輸送手段を持つに至った。これによって国内主要都市との距離は一気に短縮された。文化情報の伝播や文化の振興面で、この鉄路が地域文化に与えた影響は少なくない。

先駆者—六角紫水・清水南山・南薫造 当地域では、明治後半期において、早くも六角紫水(1967—1950)、清水南山(1875—1948)という二人の著名な工芸家を輩出している。この二人の工芸家は、明治後半期から大正・昭和戦前期を通じ、わが国近代工芸が美術の一分野として確立していく時期、その中枢に身を置いた人物として、斯界での存在感には重厚不動のものがあ

る。まず、江田島市大柿町出身の六角紫水は、東京美術学校の第 1 期卒業生として、横山大観らとともに岡倉天心を師と仰いで行動を共にし、初期日本美術院のあり方に関与したほか、アメリカに赴いてボストン美術館やメトロポリタン美術館での漆器の調査、修復などに携わった。また、全国の古社寺に伝来する国宝調査や朝鮮楽浪漆器の調査研究を通じて古今の実作に精通。並はずれたその実力がときに周囲に理解されず、軋轢をきたしたこともあったが、旧来の漆芸作品にはみられなかった創造的な作品を遺した。

六角紫水に遅れること数年、三原市幸崎町出身の清水南山も初期東京美術学校の卒業生となった。清水は、金工の分野において地味ながら確固たる古典に立脚した優れた作品を遺した。その得意とするところは“片切彫り”と呼ばれる技法で、他の追隨を許さなかった。求道者然とした作家の品行、人格は、いずれの方面からも敬愛され、賞讃される場所であった。清水は日本画家・平山郁夫からは大伯父(南山の妹が平山の祖母)

に当たるという関係で、その晩年、日本画家・平山郁夫の進路に大きな影響を与えることになった。

当地域出身の明治期の美術家は、上記 2 名にとどまらない。明治 30 年代の半ばには、呉市安浦町出身の南薫造が東京美術学校に入学する。南は油絵を専攻し、卒業後ただちに英国に留学、数年ののちにヨーロッパ、アメリカ経由で帰国。アカデミックな明るい画風で官展を中心に作品を発表し続けた。南は油彩画のほかに本場・英国で学んだ水彩画もよくしたことで知られている。

これら 3 人の美術家は、東京美術学校の同窓であると同時に、母校教授として教鞭を執り、昭和 7 年以降、昭和 18 年までは当地域出身の 3 人が同時に同校教授を務めるという状態が続いた。また、この 3 人は帝国芸術院会員となり、それぞれの分野で斯界の中心的立場にあった。

大正・昭和戦前期の呉美術 大正前期におけるこの地域での目立った活動は見当たらない。ただ、前述の六角、清水、南の 3 名は実質的に当地を離れた立場で存在しており、広島で開催される美術展などに要請されて参加している。これら 3 名のほかに、呉市川尻町出身で彫刻家の上田直次が 1916(大正 5)年に始まる広島県美術展覧会に毎回出品、中央の文展、帝展、新文展にも欠かさず出品、入選している。ただし、この上田とてすでに在京作家であり、地元を離れた活動であることは、上記 3 名と大差はない。この上田は、動物彫刻にすぐれ、とりわけ山羊の親子をテーマとしたヒューマニズムにあふれる写実彫刻で知られている。

大正期の沿線地域で注目されるのは、一時的にせよ、呉に美術協会が設立されたことであろう。協会の設立は 1916(大正 5)年 11 月 19 日発会した呉奨(尚)美會^{注 1}を母体とし、翌大正 6 年 3 月末には呉美術協会が設立へと動き出している。^{注 2} その中心となったのは、呉奨美會の幹部だった小田宮華湊、有田耕文、和田陵雨、野上圭齋、常光雪山らであった。その年の 5 月には大々的に展覧会を開催したようであるが、内実は伝統的な画家(日本画)と書家が参加したのみで、油彩画、水彩画、彫刻などの新しい分野の人材はまったく加わっていない。裏を返せばこの当時、明治以降に西洋から移入した美術諸分野については、当地域ではほとんど人材がいなかったということであろう。竹原、三原地区においてもおそらく同様の状況だったことが想像される。

呉地域で油彩画、水彩画などに顕著な活動がみられるようになるのは、大正末期からである。その先鞭を切ったのは、学校教育にたずさわる人びとであった。1924(大正 13)年 8 月、広島で結成されたイーゼル会がそれである。石谷辰次郎、米山利助らの師範学校関係者が中心となり、呉地区からは長田健雄、宇根元警がこの会に参加した。

長田健雄は大正前期の呉海軍工廠勤務を経て苦学して教員免許を取得、学校教育にたずさわるかたわら呉市を中心に活動した戦前の当地域を代表する水彩画家で、堅実な画風を特徴としたが、終戦を待たず、1940(昭和 15)年に惜しくも 39 歳の若さで没した。

また、宇根元警は 1930 年協会にも出品し、1931(昭和 6)年に独立美術協会が創立されると第 1 回展から出品した。宇根元は 1932(昭和 7)年に上京、彼の地で教職に就くかたわら本格的に

油彩画に取り組み、1940(昭和 15)年の第 10 回展では独立美術協会賞を受賞した。前々年昭和 13 年第 8 回展の霽光「風景(眼のある風景)」の受賞に続く快挙であった。戦後は独立会員となり、尾道在住の小林和作とともに広島を代表する作家の一人となった。宇根元が独立での地歩を固めて以後、呉では独立美術協会に出品する者が多く、鎌田知治、鎌田功治の兄弟、荒井不可志(街)、空野洲絵人(八百蔵)らが出品。1937(昭和 12)年には呉独立美術研究会第 1 回洋画新作品展を呉銀行で開いている。また戦後、豪快な抽象画に新境地を開いた呉市出身の岡部繁夫は目黒に住み 1940(昭和 15)年から独立展に出品し始めている。

一方、文部省主催のいわゆる官展(文展、帝展、新文展)は、ここから分岐した二科会や独立美術協会のような、いわゆる在野団体を志向する者を除けば、ごく一部に例外はあるものの、当時の絵画・美術工芸にたずさわる者にとっては、官展に入選することが最大の目標となっていた。沿線からも多くの官展入選者を出している。

油彩画では南薫造のほか、若山為三(忠海中卒、春陽会)、水船三洋(水船六洲実兄、東光会)、藤川九郎(呉蒼原会)、長田国夫、戸塚孝三郎(忠海中教員、光風会)、梶田英一(光風会)、池田快造(三原市、光風会)らがいた。このうち、池田快造は東京美術学校出の俊才で、光風会でも実績を重ね将来を囑望されたが、弱冠 33 歳で夭折した。

彫刻では前記上田直次のほか、木村靨(竹原)と水船六洲(呉出身)が挙げられる。水船は戦後に頭角を現し、尾道市御調町出身の圓鏝勝三とともに、日展彫刻としては異色・異形の木彫で認められた。また、木版画作品にも優れた作品をのこした。

工芸分野では、突出する六角、清水の活躍のほかは取り上げるべき活動はみられない。ただし、官展・在野という区分けから超然として存在した迦洞無坪を見逃すことはできない。迦洞は 1935(昭和 10)年、京都から竹原沖の生野島に一家を挙げて移住、築窯した。当地に移住して以後は、主に素焼きの仏像などを制作していたようであるが、京都時代のものには瞠目する作品が多い。

日本画でもこの時期、官展で注目されるのは、わずかに京都在住の池田榮廣(呉出身)を見出すのみである。ただし、ここでも官展という枠をはずせば、一時期、日本画の革新に身を投じた船田玉樹(呉市出身)の存在を忘れることはできない。船田は昭和 10 年代、岩橋永遠と歷程美術協会を結成するなど、東京を拠点としたが、戦後は呉に帰る(のち広島)、院展、新興美術院を舞台に活動した。

以上は、言わば専門家集団による公募展での活躍の模様であった。しかし、ここで特筆すべきは、1928(昭和 3)年 8 月ごろ、呉にポベニエ會という団体が生まれたことである。この会は当初、海軍士官と呉市内の小学校教員を主要メンバーとして発足。^{注3} 翌年 1 月に第 1 回展を開いた。^{注4} 本会は、美術専門家のみならず、広く一般愛好者に門戸を開いたという点で、画期的な展覧会となった。しかし、1934(昭和 9)年の秋季展^{注5}を最後に記録から消える。

呉の“みづゑ” 呉線沿線の美術を語ろうとすると、呉の水彩画(みづゑ)に触れないわけにはいかない。過去から現在を通じ、呉の“みづゑ”は県内の他の地域に比べて明らかに盛況を呈してきた。その原因を問えば、日本水彩画会の重鎮・南薫造を輩出した土地柄ということもあつたし、長田健雄らを中心とする指導者に恵まれたということもある。ここでは、現在までに確認できた資料を提供しておく。

1915(大正 4)年に開かれた広陵美術展覧会(4.25~5.5 広島・千田町元広島高師附属中寄宿舎)^{注6}には、日本画、油彩画、彫刻とならび、その一部門として水彩画が設けられている。この展覧会には石谷辰治郎(柑圃)、米山利助ほか 4 名、27 点の水彩画が出品されている。石谷、米山ともに東京高師の出身で、それぞれ広島高師、広島師範の教官を務めた人物である。このように、大正初年には広島でも水彩画が盛んに制作される時代に入っていた。

中央の水彩画界に目をやると、わが国における水彩画の先駆者・三宅克己や大下藤次郎の事歴はさておき、大正元年 9 月に大下藤次郎没後一周忌を期して日本水彩画会を創設する動きが高まり、石井柏亭、石川欽一郎、戸張孤雁、丸山晚霞、白瀧幾之助らが中心となって「日本水彩画会」が創設される。また一方で、中西利雄らによって 1922(大正 11)年、東京三脚会が誕生する。この会は 1924(大正 13)年 11 月には「蒼原会」と改称、以後、水彩画振興のために研究会や展覧会を開催するなど、その活動は全国的に展開していくことになる。

ずっと下って広島では、1936(昭和 11)年広島蒼原会第 2 回水彩画展(2.27~3.4 広島県産業奨励館)の開かれた記録がある。第 1 回展の開催についてはつまびらかでないが、前年の昭和 10 年頃を第 1 回展とするのが穏当だろう。広島蒼原会第 2 回展の内容は、

〈出品者等〉内山市郎、名柄正之、井原大吉、長田健雄、坂江重雄、西原務等の作品 48 点^{注7}

であった。長田健雄は呉在住である。また、蒼原会は呉でも「呉蒼原会」として開催している。

第 1 回展(1939.06.24~25 五番町小学校)

〈出品者〉—不明—^{注8}

第 3 回展(1942.09.26~27 呉新聞社)

〈出品者〉宮村久蔵、中塩芳包、瀧川満三、村上静一、筏登、小倉義光、林義勇、村上哲也、四重田要、諏訪浩三、藤川九郎、生田正雄、畠田谷輝男、佐々木秀雄、西村武雄、中塩幸造、熊佐克彦、柳井秀夫^{注9}

第 4 回展(1943.10.09~10 呉新聞社)

〈出品者〉四重田要、諏訪浩三、生田正雄、藤川九郎、瀧川満三、宮村久蔵、小倉義光、佐々木秀雄、西村武雄、熊佐克彦、村上静一、中塩幸造、林義勇、村上哲也、筏登、中塩芳包^{注10}

いま確認できるのは、呉関係では以上 3 回分で、第 2 回展と第 5 回展以降は不明である。これらの展覧会は、中西利雄らの推し進めた蒼原会の理念、すなわち「水彩画の振興」の一地方における具体化である。



昭和 12 年 8 月、中西利雄が広島蒼原会の招きで訪れた広島で呉線の蒸気機関車に同乗したときのスナップ・ショット。国鉄の作業服に扮する左から小磯良平、猪熊弦一郎、太田忠、中西利雄(《SL 機関手画家・太田忠展》図録から転載)。

さて、中西利雄と呉線については、猪熊弦一郎が回想するとおきのエピソードがある。注 11

中西はアトリエの至る所にSLの模型を置くほどの大のSLマニアだった。1937(昭和 12)年8月、その中西が広島蒼原会の招きにより、水彩画講習会の講師として広島を訪れた。そのとき、国鉄の機関手画家で新制作派協会展に出品していた太田忠(のちに会員)の指導で、同行した猪熊弦一郎、小磯良平とともに広島～呉間の機関車に同乗、往復した。呉線往復 50 キロ余りの距離を機関車に同乗して走ったというのである。本職の太田が運転・指導係、中西と小磯が石炭を窯にくべる機関係、猪熊が汽笛係という役割分担だった。古き良き時代のエピソードである。中西は、その前年の昭和 11 年にも広島～呉間を往復していたらしい。前年といえば中西の結婚した年で、この年の暮れ、広島のピカソ画房・佐渡久士の実妹・佐渡富江と結婚した年でもある。中西と広島の間には、それほど深いつながりがあった。

閑話休題。呉における水彩画は、昭和 10 年代においては、上記「呉蒼原会」のメンバーによって推進されたとみてよい。

学校教員の地域文化活動 職場美術という観点から沿線の美術を見ると、学校の教職員が圧倒的に多く、この地域の美術界に深く関与している。この傾向は当地域だけの特色ではなく、全国的な傾向でもあるだろう。当然ながら、彼らは専門教育を受けた指導者として各校において児童生徒を指導する一方、その一部は地域の文化活動にも積極的に関わった。

さらに、一部の教員は地域内にとどまらず、中央の美術界との接点を持ち、各種の展覧会に積極的に出品している。また、地元での活動にも熱心で、1932(昭和7)年結成の互歩(ゴッホ)会は「呉市内の学校の教員を中核とした水彩画中心の団体」注 12 とされ、年1回のペースで展覧会を開いた。「互歩会」の命名者は水彩画の生田正雄であったとされる。注 13 昭和 10 年第4回展当時のメンバーには、長田健雄、藤川九郎、生田正雄、長田國雄、仲田義夫、小坂秀雄、中鹽幸造、佐々木秀雄、林義勇、佐伯朝一、中鹽芳包、宮村久蔵の名前が見える。注 14 互歩会は、1943(昭和 18)年の第 12 回展を最後に戦前における活動を収束した。同会は戦後 1946(昭和 21)年7月、発展的に解消して白玄会となる。注 15 なお、互歩会には宇根元警らの独立グループは参加していない。

時代は下るが、今回展の出品作家で、戦後、呉市立中学校で教壇に立った人びとを職員名簿注 16 から拾うと、田辺伝、清田内匠、其阿弥太郎、生田正男(正雄)、金原(相沢)徳子、鎌田功治、松谷▲、松本壽人、中本侑孝、川上靖司といった名前を見出すことができる。また今回展への出品はないが、林義勇、阿武(あんの)勝、久保田辰男らの名前も確認できる。

戦後の呉美術 1946(昭和 21)年 11 月 21 日、呉美術協会が設立された。名誉会長には呉市長をいただき、副会長に朝井清、理事として藤川九郎、鞆谷繁夫、堀内唯一、空野末人、生田正雄、吉岡繁人、村上哲也、林俊也、川端義男、矢田邊清芳、船田玉樹が名を連ねていた。協会は、白玄会、裸心会、芸南文化同人会などの市内各美術団体と呉市社会教育課が発起人となり「呉市を中心に美術の昂揚を期し且つ美術愛好家の技能向上」を目的としたものであった。注 17 戦後の呉美術は、呉美術協会を中心に展開していく。

また、終戦直後の美術を含む文化運動としては、藝南文化同人会の活動が特筆される。同会は 1946(昭和 21)年 2 月、永瀬義郎、朝井清、谷本剛平らによって賀茂郡竹原町頼聚遠亭で発会式を行った。注 18 ついで翌 3 月には竹原高女で芸南文化同



《藝南文化》の創刊号と第2号(広島県立美術館保管)。朝井清が表紙絵(版画)を担当している。

人会美術部第1回展を開催。永瀬義郎、朝井清ら6人の作品 42 点を展示している。注 19 さらに、同年6月には永瀬義郎・朝井清・山下品蔵三人展(6.1-9 呉市中通・はこ舟)を開いた。注 20 また同人誌として《藝南文化》を発行、現在のところ第2号までの発行が確認されている。芸南文化同人会には疎開中の南薫造も感心を寄せたが、その中心となったのは、呉の朝井清と永瀬義郎であった。永瀬は茨城県の出身でわが国創作版画の草分け的存在だが、サト夫人(マダム・テロンドル、旧姓藤原)の出自が安芸津町(現在東広島市)という縁故から風早に疎開していた。永瀬は美術のみならず、演劇の面でも地域に溶け込んで活動している。また、朝井清は、永瀬同様に版画を専門としたが、戦前・戦後を通じ東光会の主要メンバーとして活動するかたわら、日展に大型版画を発表しつつ、初期の呉美術協会をはじめ、地域の文化に貢献した。

戦後の呉美術界は、呉美術協会を中心に、1950(昭和 25)年結成のヤネウラ同人会のようなユニークな青年画家グループを生むなど、多様に展開していくのである。

注 1 大正5年 11 月 18 日付け《中國新聞》。この紙面では「呉奨美會」とするも、大正6年3月 27 日付では「呉尚美會」とする。

注 2 大正6年3月 30 日付け《中國新聞》。

注 3 千田武志《呉美術界の特徴と呉美術協会の設立》(《美術くれ》所収 1996 年 呉美術協会)。ポベニエ會は「ポベニエ會」と表記したのもあり、いずれが正式名称かは不明。

注 4 昭和4年1月 19 日付け《中國新聞》。

注 5 昭和9年 10 月 30 日付け《朝日新聞》。

注 6 大正4年4月 24 日、27 日、5月 1-3 日、5日付け《藝備日日新聞》。

注 7 昭和 11 年2月 21 日付け《藝備日日新聞》。

注 8 昭和 14 年6月 25 日付け《芸備日日新聞》。

注 9 昭和 17 年 9 月 22、26、27 日付け《中國新聞》。

注 10 昭和 18 年 10 月 10 日付《中國新聞》。

注 11 猪熊弦一郎《SLを運転した話》(《アサヒグラフ別冊 '85 美術特集・中西利雄》)所収 1985 年 朝日新聞社)

注 12 前掲、千田武志《呉美術界の特徴と呉美術協会の設立》。

注 13 《長田健雄切抜帳》による(掲載紙不明)。

注 14 同上。

注 15 前掲、千田武志《呉美術界の特徴と呉美術協会の設立》。

注 16 「呉市立中学校職員名簿—昭和 22 年度～昭和 61 年度」(呉市立中学校長会編《40年のあゆみ》—昭和 63 年—所収)。

注 17 昭和 21 年 11 月 23 日付け《中國新聞》。

注 18 戦後広島美術年譜(1)(《'84 美術ひろしま》)所収 1984 年 財団法人広島市文化振興事業団)

注 19 同上

注 20 前掲、千田武志《呉美術界の特徴と呉美術協会の設立》。

(くらはし きよかた 呉市立美術館長)